

結界

小倉 一純

俺は結界けっかいに暮らしている。それは、多摩川の河原と、奥深い山との間にある、端境はざかいの辺あたりである。

どうして妖怪ようかいにならなければならなかったのか、毎日そのことばかりを考えている。寂しくなると、水際まで来て向こう岸を眺める。川の流れる音だけが聞えている。すべては深い霧の中だ。待てど暮らせども、何も起こらない。期待外れの思いを胸に抱いて、俺はまた結界のねぐらへ戻る。

懲りずにまた川岸まで来ていた。何もないことはもう分かっていたから、すぐに帰るつもりだった。だがその日は違っていた。

深い霧の向こうから、ギツチラコウ、ギツチラコウという音が聞えてくる。それは段々大きくなり、舟の舳先へびさきに立つ船頭の姿がぼんやりと見えてきた。被り笠かぶりかさと蓑みのを身につけている。

やがて小舟がその形を現す。ほかに同じ姿

の男たち五人が座っている。

船頭が器用に竿さおを使い、舟は岸の小さな船着場へ身を寄せた。男たちは、手に手に酒瓶やら料理の入った折詰おりづめを持っている。

船頭が敷いた御座ござの上で酒宴が始まる。知らぬうちに俺も加わっていた。

気がつくくと霧は晴れ、向こう岸では桜が満開だ。よく見ると彼らは皆、俺が人里にいたころの幼馴染おさなじみである。次から次へと子供の時分の思い出話をした。くだらぬ馬鹿話ばかりであるがとても愉快だ。

酔った俺が、川面へ小便を垂れていると、翌年また来ると言い残し、彼らは向こう岸へ帰って行った。

俺にも、彼らと一緒に向こう岸へ渡る日が遠からずやって来るのかも知れない。

水面みなもに映った俺は、人間の姿をしていた。